日経産業新聞
NIKKEI BUSINESS DAILY
2011年(平成23年)
5月13日
金曜日

トップの挑戦

「未来のアルバム」作りに奮闘

ホットアルバムコム社長 小星 重治氏

写真データ管理規格守る

被災者が必死になって探しているのは思い出で詰まった家族のアルバムだった――。東日本大震災の光景を目にするたび、ホットアルバムコム（東京都八王子市）社長の小星重治（67）は胸を熱くする。悠々自適のリタイア生活を完全にあきらめ、写真データの管理ソフト事業に身を投じたのは約5年前。写真の未来への思いが小星を奮い立たせる。

小西六写真工業（現コニカミノルタホールディングス）の技術者だった小星は写真業界で名を残した。カラーフィルムの水洗処理をなくすことに成功。町の写真屋ですぐに現像できるようにした。その後も成果を重ね科学技術庁長官賞などを多数受賞、1999年には紫綬褒章も受けた。そんな小星がなぜベンチャー企業を立ち上げたのか。

◇ ◇

2006年1月、すでに定年を迎え、コニカミノルタの特別顧問だった小星に、ある知らせがもたらされた。コニカミノルタが突然、カメラと写真事業から撤退すると発表したのだ。

小星は当時、デジタル写真のデータを長く保存して、パソコンやテレビで鑑賞できる仕組みづくりに携わっていた。競合する富士フイルムやコダックなどと交渉を重ね、デジタル画像を保存するための規格「エバープレイ」にめどをつけたばかりだった。

「撤退は仕方ないが、写真を未来に残せるエバープレイ規格と（その規格を使ったアルバムソフトである）ホットアルバム事業は業界全体のもの。何とか残してもらえないでしょうか」

記者会見の前日、当時の社長だった岩居文雄に対し、2時間にわたり直談判した。あまりの熱心さに、岩居は「中央研究所のインキュベーション事業として残そう」と折れ、事業は存続されるかにみえた。

ただ岩居からは、2カ月後に「写真関連の事業はちり一つ残せない。すべて撤退する」との連絡が入る。理由は社長交代だった。「申し訳ないが新社長の方針なので了解してもらいたい。我慢してほしい」

憤慨した小星は猛抗議したが、決定が覆ることはなかった。小星は「私財をなげうって新たに会社を立ち上げる」と誓う。そうして06年10月に起業したのがホットアルバムコムだ。

最初に手がけることになったのが関連する特許などの譲り受け。退職してから起業するまでの約半年間、コニカミノルタの部門担当者を回り、何とか安く譲ってもらえるよう粘り強く説得してまわった。

一部上場企業から個人への事業譲渡という前例の少ないケースで「非常に難しかった」が、200万～300万円を投じて何とか特許や商標、事業権などを手にした。「これまでお客様に写真を買ってもらっていたお礼も込めて写真文化を守る」と腹をくくった。

◇ ◇

まずは互換性があり記録メディアを問わずに簡単に写真を残せるホットアルバムを普及させなければならない。小星はデジタル機器メーカーに日参する。

真っ先に賛同したのがカシオ計算機。同社のデジカメに同梱（どうこん）する無料アルバムソフトとして採用してもらった。写真現像の日本ジャンボーも、ホットアルバムをDVD書き込みサービスとして提供することになった。

次世代技術の開発も進めた。支えたのは小星を慕って入社した旧コニカ時代の仲間たちで、米アップルの「iPhone（アイフォーン）」向けに、写真の色を自動的に判別し補正するソフト「きれいカメラ」を開発。国内外でダウンロード数が40万件近いヒットになった。

パソコンやメモリーカードのまま写真データを保管して、すべて失ってしまうことを何とか防ぎたい――。小星を突き動かすのはこの一点の思いだ。写真に携わって早50年近く。次の100年をも見据えた挑戦を続ける。

＝敬称略

（井上孝之）

こぼし・しげはる　1963年神奈川県相原高卒、小西六写真工業（現コニカミノルタホールディングス）入社。システム開発部長などを歴任。2006年10月、ホットアルバムコムを設立。神奈川県出身。

「ホットアルバム」の操作画面